

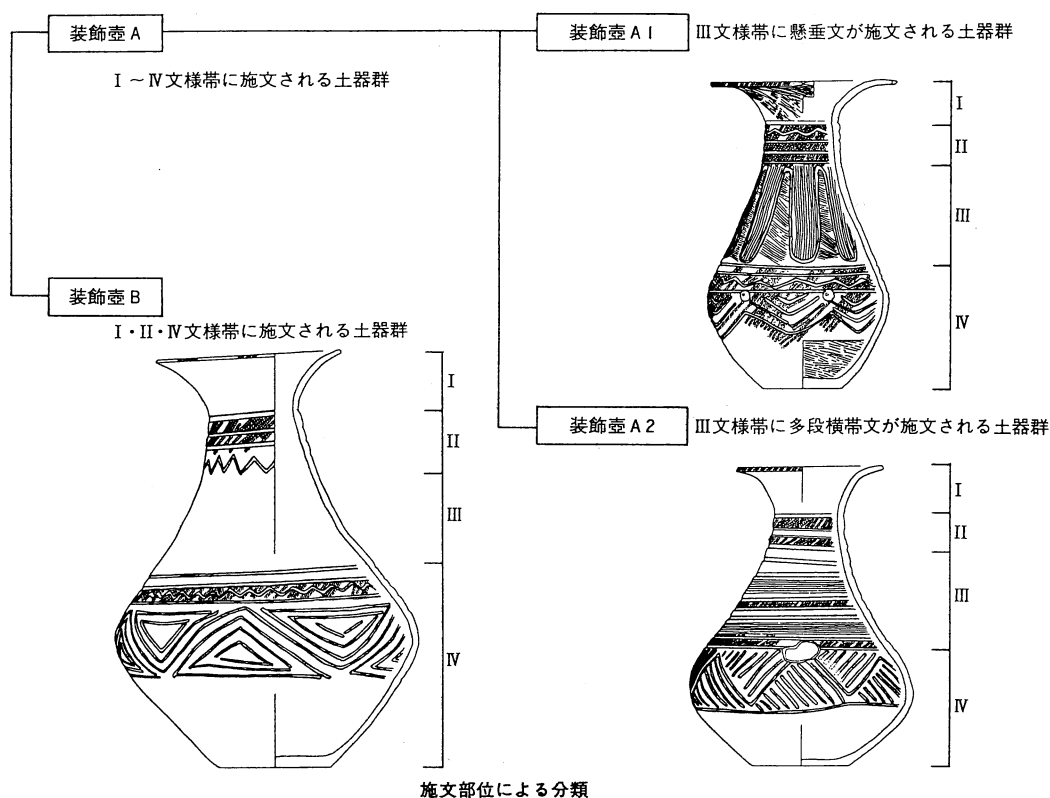
第1章 壺形土器の文様帯構造と変遷

1 文様帯の設定

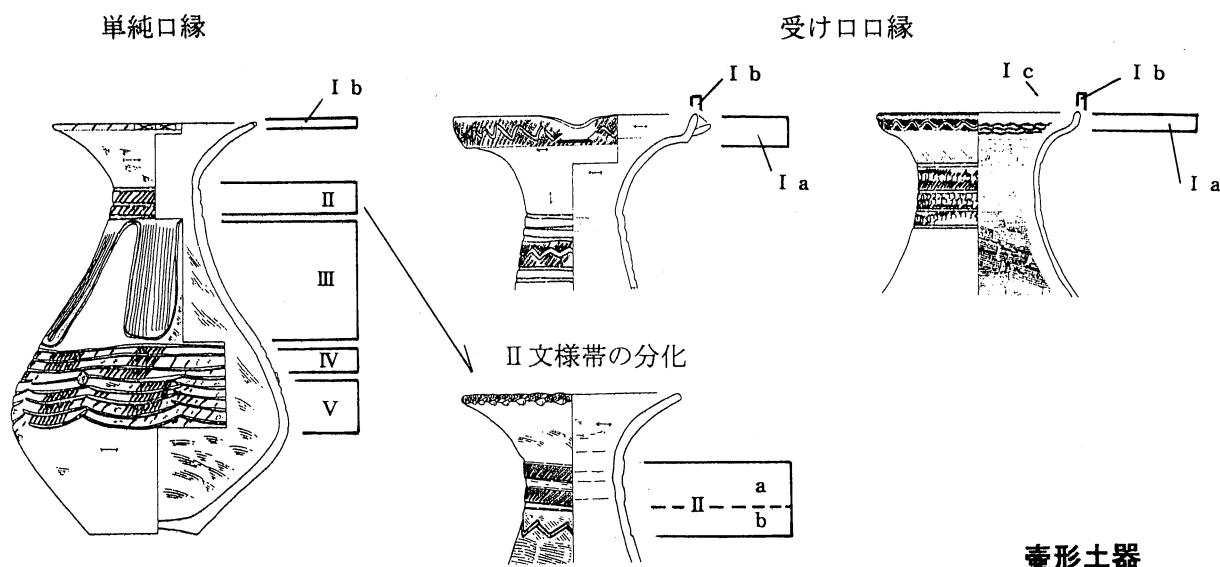
栗林式土器は壺形、甕・台付甕形、鉢形土器に文様帯が設定され、「土器本文篇」では器種ごとの文様帯基本構造を提示した。本節では壺形土器を選出して、文様帯構成・系統、段階毎の傾向を述べる。

壺形土器の文様帯に関する近年の論考には、上田典男氏の業績がある(上田 1995)。上田氏は、「正面観」を持つ土器の検討で「装飾壺」にⅠ～Ⅳ文様帯を設定し(第1図)、Ⅰ文様帯を口縁部、Ⅱ文様帯を頸部、Ⅲ文様帯を胴上部、Ⅳ文様帯を胴下部とした。また、Ⅰ～Ⅳ文様帯に施文する装飾壺A及びⅠ・Ⅱ・Ⅳ文様帯に施文する装飾壺Bがあり、装飾壺AにはⅢ文様帯へ懸垂文を施文するA1と多段横帯文を施文するA2の存在を指摘した。文様施文が顕著な壺形土器の検討にあたり、文様帯を設定するのは有効な手段で、文様帯構成及びⅢ文様帯における文様の差異から「装飾壺」に3系統を認めた点は評価されよう。

さて、「土器本文篇」で提示した壺形土器の文様帯構造を再確認する(第2図)。壺形土器は口縁部・頸部・胴部に文様帯が設定され、文様帯構造はⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴとなる。上田氏との違いはⅣ文様帯にあり、筆者は上田氏のⅣ文様帯をⅣ・Ⅴ文様帯に2分した。後述する通り筆者のⅣ文様帯は、2段階以降にⅢ文様帯の拡大化に伴い縮小する等独立した動きが認められる点による。Ⅰ文様帯は口縁部で口唇部への施文が基本だが(Ⅰb)、口縁部内面への施文が少数あり(Ⅰc)、更に受け口状口縁は口縁部外面に文様帯



第1図 装飾壺の文様帯 ((上田 1995) より転載)



第2図 壺形土器の文様帯構成

を有する (I a)。II文様帯は頸部で、文様帯下部へ附加文が付属する例があり、その場合は主文様 (II a) と附加文 (II b) とに分化する。III～V文様帯は胴部で、胴上位 (III)・中位 (IV)・下位 (V) に独立した文様帯が形成され3帯構成となる。胴部3帯構成は他の器種に採用されず、壺形土器特有の構造である。

2 文様帯構成と系統

次に、文様帯の系統とその構成を示す。壺形土器にはA～Dの系統が存在し、文様帯構成の差異から各系統が更に細分される (第3図)。

A系統	A1: I + II～IV	C系統	C1: I + II
	A2: I + II～IV + V		C2: I
B系統	B1: I + II + III + IV + V	D系統	
	B2: I + II + IV + V		
	B3: I + II + V		
	B4: I + II + IV		

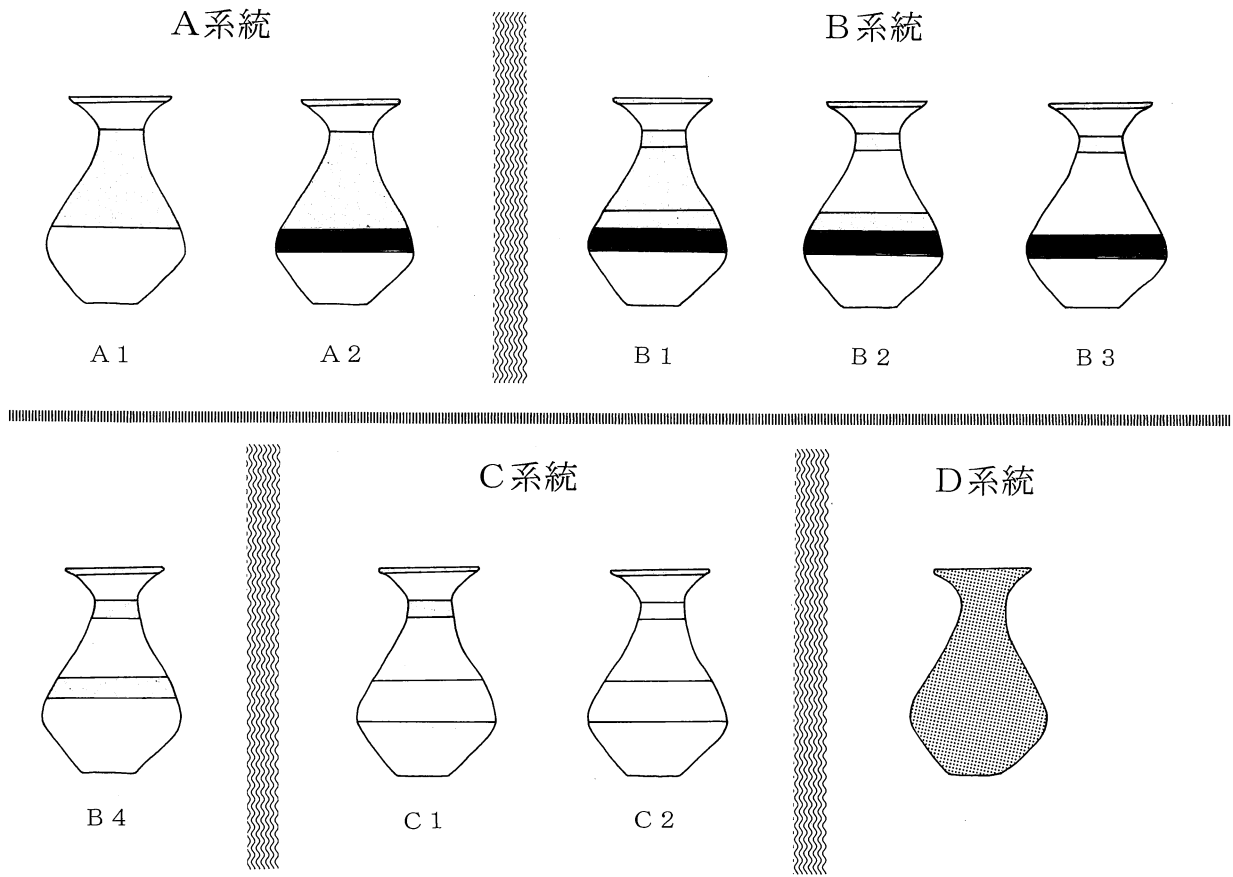
A系統は口縁部文様帯が独立するが、頸部から胴部の文様帯が未分化で、胴下部～底部を除く器面全面への文様施文指向が窺われる。頸部以下の文様帯は横走沈線文・波状沈線文等の横帯文が連続し、II～IV文様帯を明確に区分するのは不可能である。V文様帯の有無からI + II～IVのA1系統と、V文様帯に連弧文・重山形文等を施文するI + II～IV + VのA2系統が確認される。

B系統は器面全面への施文指向という点ではA系統と共通するが、III文様帯が確立してII～V文様帯が明確に区分される。文様帯構成はI + II + III + IV + V、I + II + IV + V、I + II + V、I + II + IVで、それぞれB1・B2・B3・B4系統となり、B1系統のIII文様帯には懸垂文が施文される。

C系統は胴部文様帯の施文が欠落する、無文化指向の系統である。口縁部及び頸部への施文が看取されるI + IIのC1系統と、口縁部のみのC2系統が存在する。

D系統は文様帯を持たず、底部を含む器面全面・口縁部内面に赤色塗彩を施す。

出土状況を見ると、A系統主体でB・C系統が若干伴う例・B系統主体でA・C・D系統が若干伴う例・



第3図 文様帯の系統

C系統主体でB・D系統が若干伴う例等があり、この差異は時間的差異を示す事が予想される。本遺跡出土土器群の変遷試案が青木一男氏により提示されたが（青木 1996）、これを基本としながら文様帯構成及び系統の時期的変化を観察する。

3 栗林式土器の中～新相における段階区分

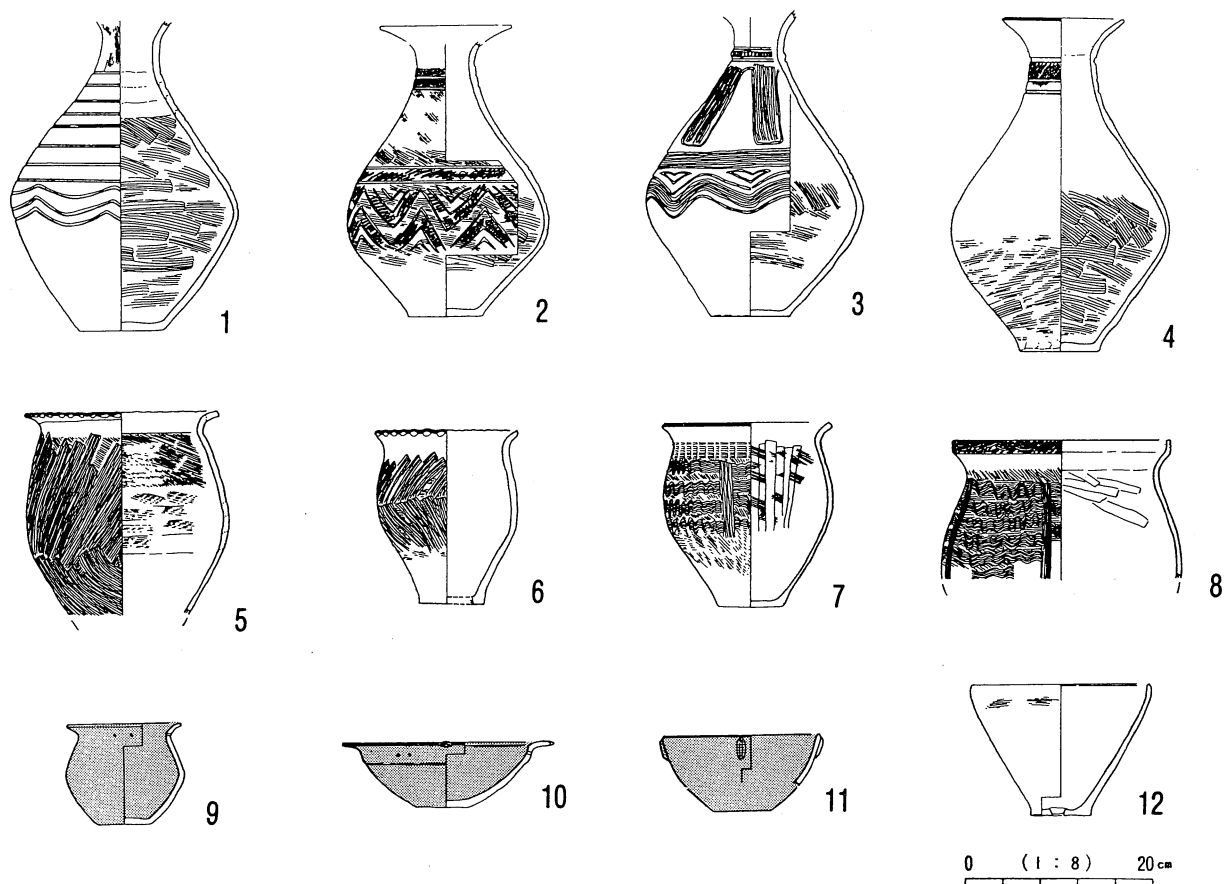
栗林式土器はⅠ・Ⅱ式の細分がなされてきたが、松原遺跡出土土器群を概観するにあたり新視点からの観察が必要との認識に至った。従来のⅠ・Ⅱ式といった概念を一旦取り払い、取り敢えず栗林式全体を古・中・新相に区分すると、本遺跡出土土器群は中～新相に所属する事が考えられる。

青木一男氏は中～新相の土器群に対して、器形・文様・施文手法等に注目しながら様相1～3の3段階を設定した（第4～6図）。本稿も基本的にはこの変遷案に従うものであり、その内容に触れておく。

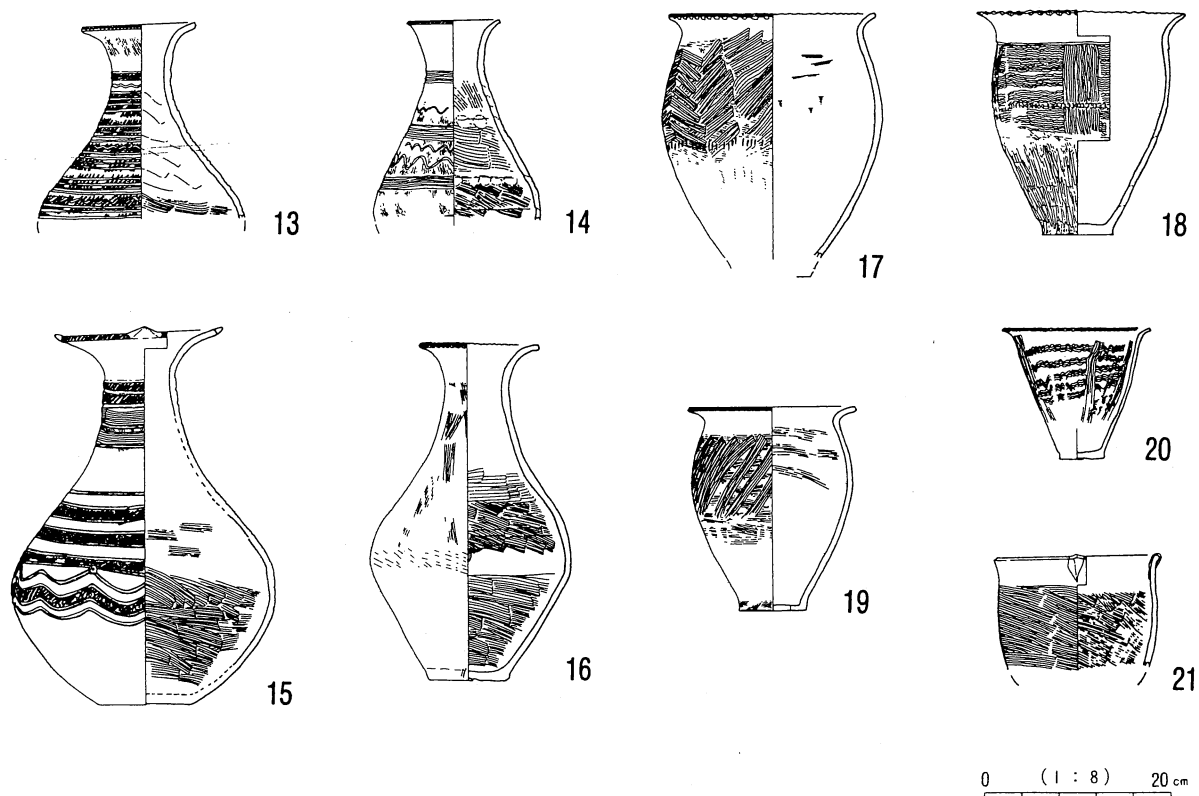
様相1（第4図）

- SK156・SB260出土土器が、基準資料である。
- 器種構成は、壺・甕・鉢・高杯よりなる。
- 壺は細頸傾向で、口縁部は短く外反し狭口になるものと、外反度が大きく広口傾向のものがある。
- 壺体部の加飾は、縄文、沈線文、櫛描文で縦位あるいは横位に文様施文を行う。
- 甕の器形は、深鉢型と卵型がある。
- 甕の文様構成は、櫛描羽状文・波状文を主体とし、胴部に横羽状文、刺突列点文、口縁部に指オサエあるいは押し引きによる波状口縁が一定量見られる。

S K156

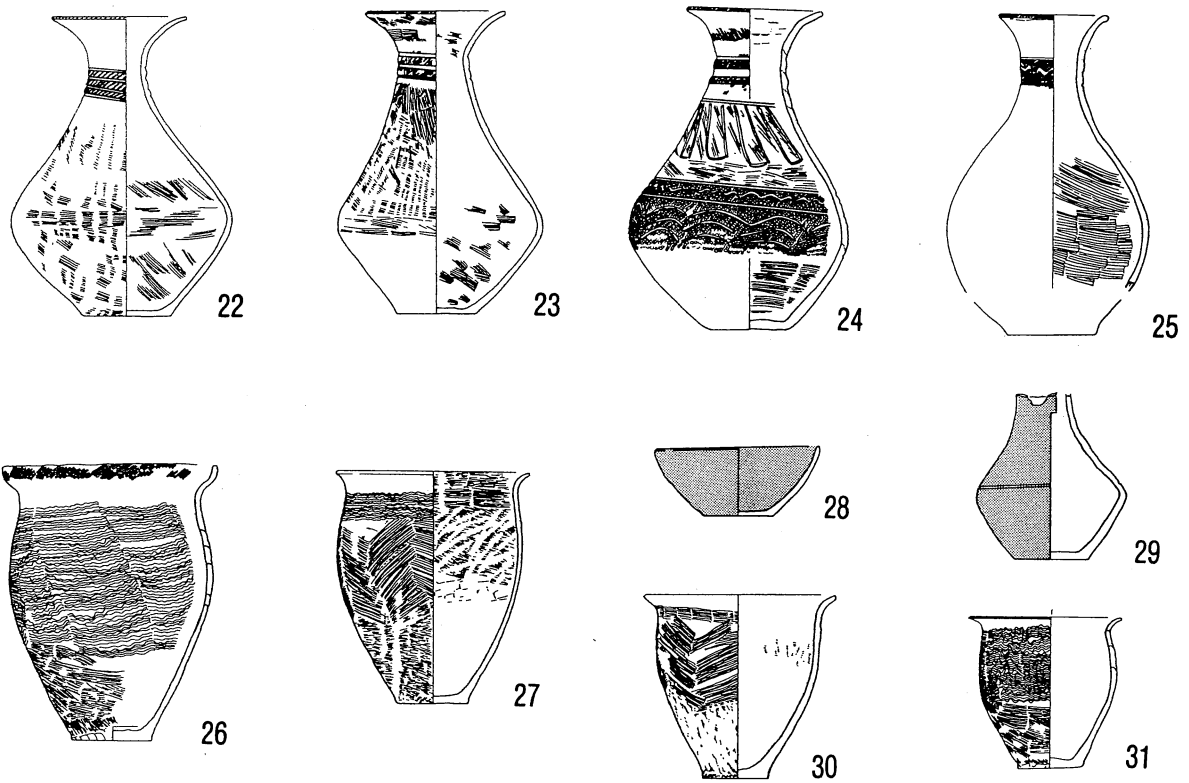


S B260

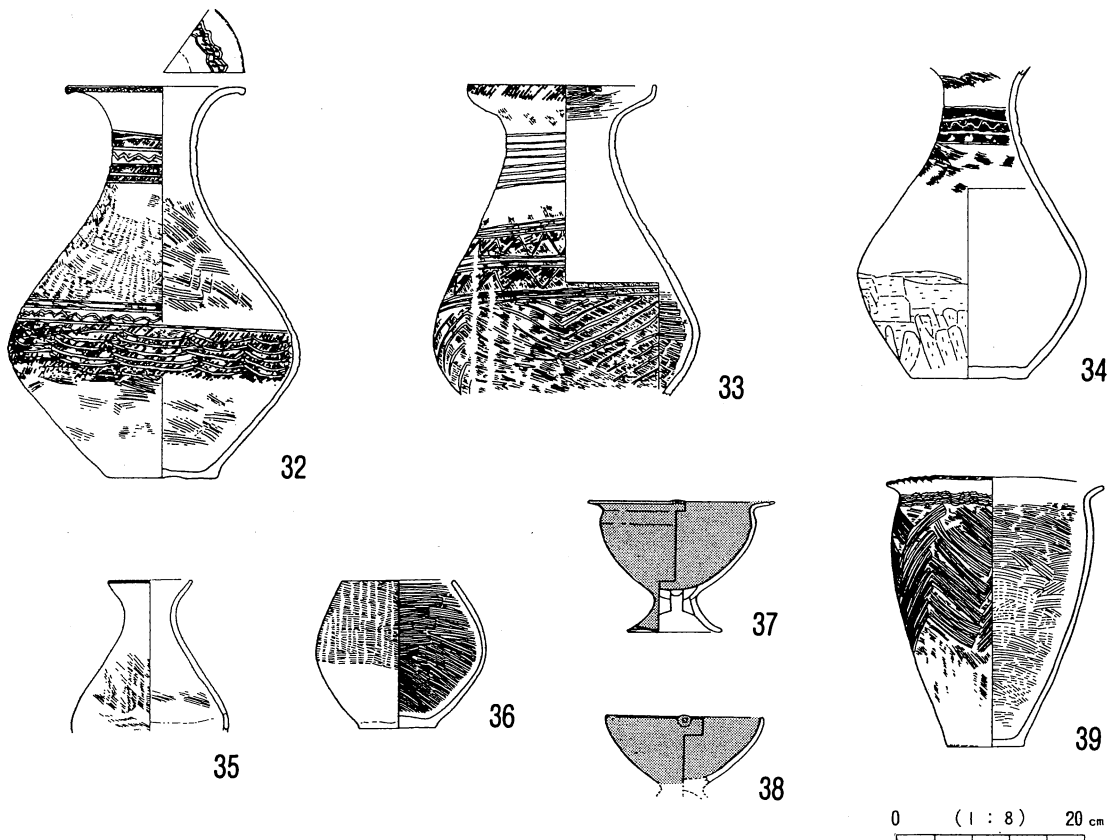


第4図 様相1の土器群

S B 1102

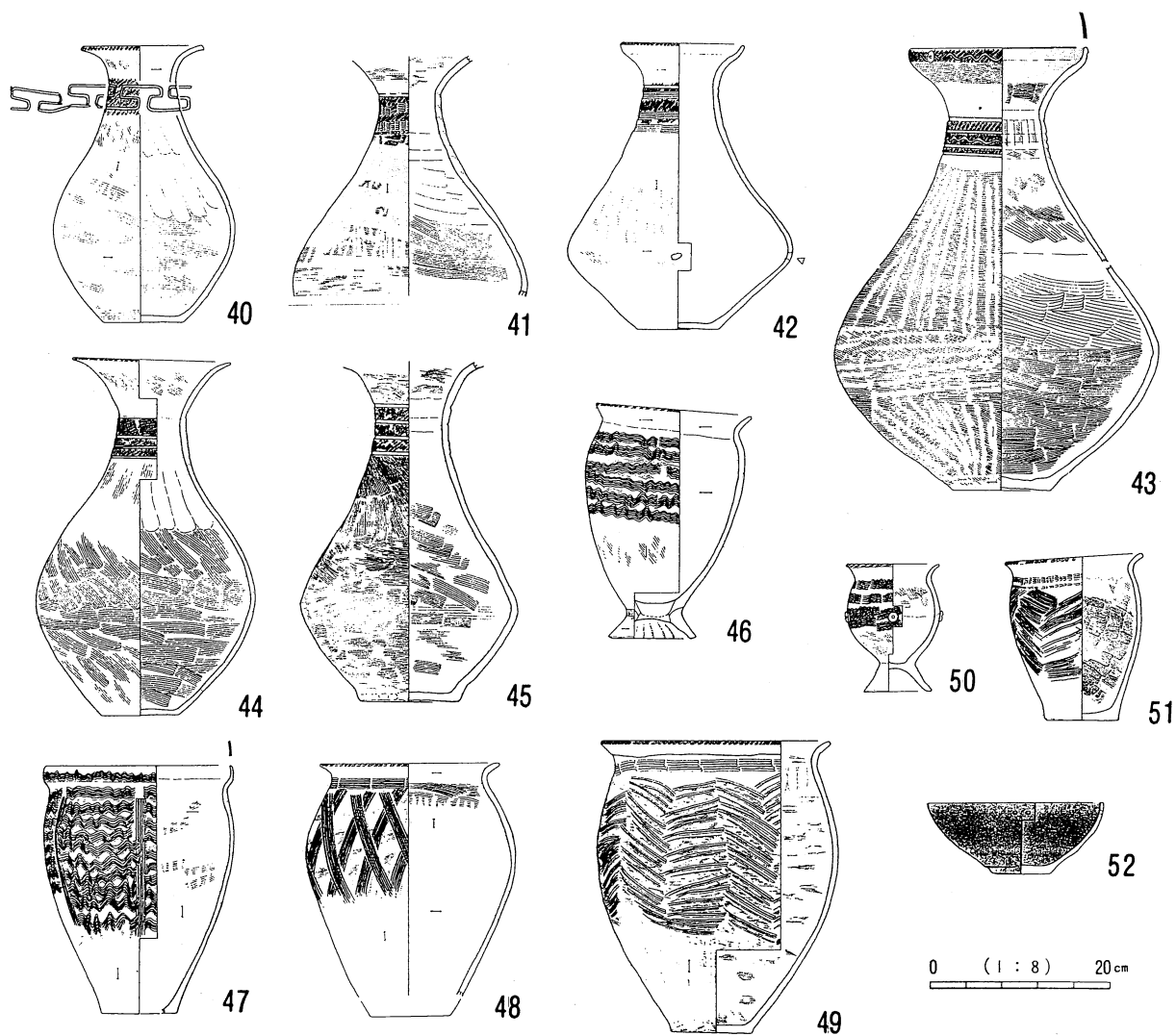


S K 1333

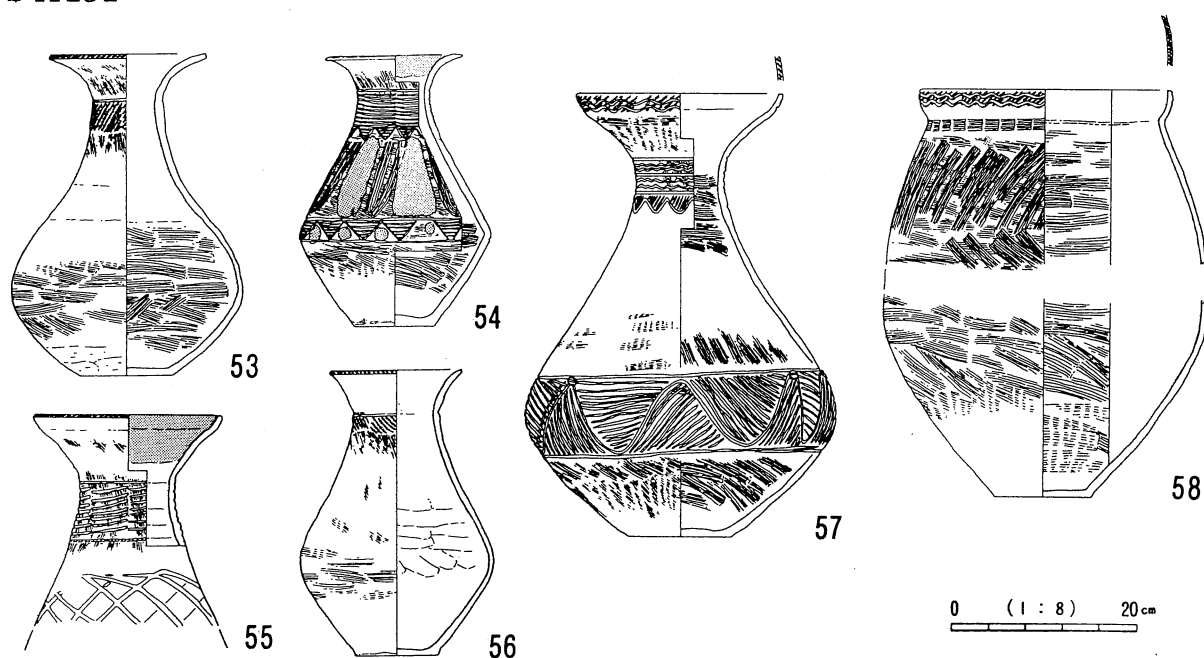


第5図 様相2の土器群

S B 360



S K 191



第6図 様相3の土器群

様相 2 (第 5 図)

- SB1102、SK1333が基準資料となる。
- 器種構成は、壺・甕・鉢・高杯より成り、台付甕・高杯が様相 1 より増加傾向にある。
- 壺は、細頸傾向のものと太頸傾向のものがあり、口縁部が大きく外反することによって広口となる。
- 様相 1 に見られた、細首で狭口タイプの壺は減少する。
- 壺体部の加飾は、沈線文、櫛描文の施文が減少し、ヘラミガキによるものが増加する。
- 全面赤色塗彩の小型壺が見られる。
- 甕は、頸部文様帯に波状文、直線文、簾状文を持つものがあり、体部に縦羽状文を施文する率が高く、横羽状文、胴部刺突列点文が減少する。
- 高杯は、鉢に低脚の台が付いた形となり、口縁端部は鐙状と椀型のものが見られる。

様相 3 (第 6 図53～58)

- SK191が基準資料となる。
- 器種構成は、壺・甕・鉢・高杯より成る。
- 壺は細頸傾向のものと太頸傾向のものがあり、太頸傾向が一定量を占める。
- 壺体部への加飾は、胴全体にわたる多段横帯文が消滅する。
- 頸部に、太いヒゴを束ねた擬似簾状文や沈線による鋸歯文が施文され、この文様は様相 4 に繋がる。
- 壺口縁部内外面の一部に、赤色塗彩を行うものが出現する。
- 甕は卵形が見られ、横羽状文が施文される。

また、壺形土器の器形変化について、掲載された図版を見ると最大径が胴部中位から徐々に下降しており、様相 1～3 への過程で、壺形土器に最大径の下降に伴う器形変化が見られる点を示唆している。

様相 1～3 への変遷は、この前後に所属する長野市浅川扇状地遺跡群牟礼バイパス D 地点出土土器群、長野市吉田高校グランド遺跡出土土器群を含めて見た場合に妥当と考えられるが、様相 2 については細分の余地があろう。長野市榎田遺跡では、様相 2 に該当する土器群が出土したが(第 7 図)、様相 2 の基準資料とは若干の差異が認められ、特に壺形土器では次の様な差異が指摘される。

- ① 最大径を胴中位に持つ例が存在しない。
- ② III 文様帯の幅に狭い例がなく拡大化している。
- ③ 櫛歯状工具による簾状文あるいは擬似簾状文が II 文様帯に看取される。
- ④ 様相 3 の指標の 1 つとされた II 文様帯の鋸歯文が存在する。

①～④は様相 3 により近いと言え、また、太いヒゴを束ねた直線的な擬似簾状文が含まれない等の点で、様相 3 には達していない。従って榎田遺跡出土土器群は、様相 2 の基準資料より新しく様相 3 より古い土器群と位置付けられ、この結果様相 2 には基準資料の段階と榎田段階が設定されよう。

以上から、様相 1 を 1 段階、様相 2 の基準資料段階を 2 段階、様相 2 の榎田段階を 3 段階、様相 3 を 4 段階と呼び替え、また、松原遺跡 3 段階の基準資料として SB360 出土土器 (第 6 図40～52) を提示する。

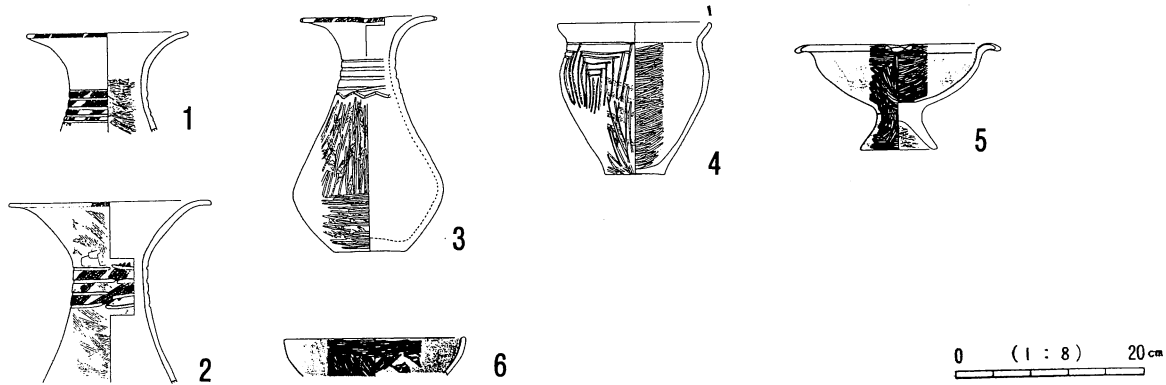
4 各段階の文様帯構成・系統

4 段階区分に従って、壺形土器の文様帯構成・系統を概念的に第 8 図に提示した。A～C 系統を中心に、各段階の状況及び器形変化を確認していく。

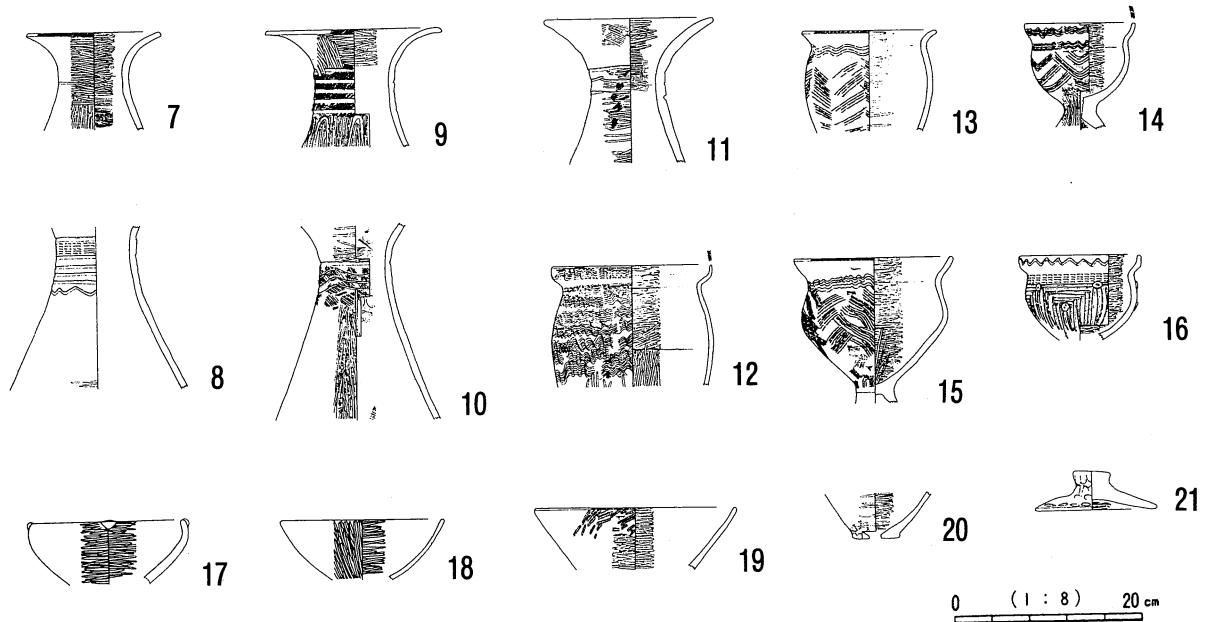
[1 段階]

A～C の合計 8 系統が存在するが、主要系統は A1・2、B4 である。底部を除く器面全面への施文指向が強く、特に A1・2 系統は II～IV・V 文様帯へ横位多段の連続した文様を施文する。注目すべきは I + II +

S B1471



S K3277



第7図 榎田遺跡出土土器

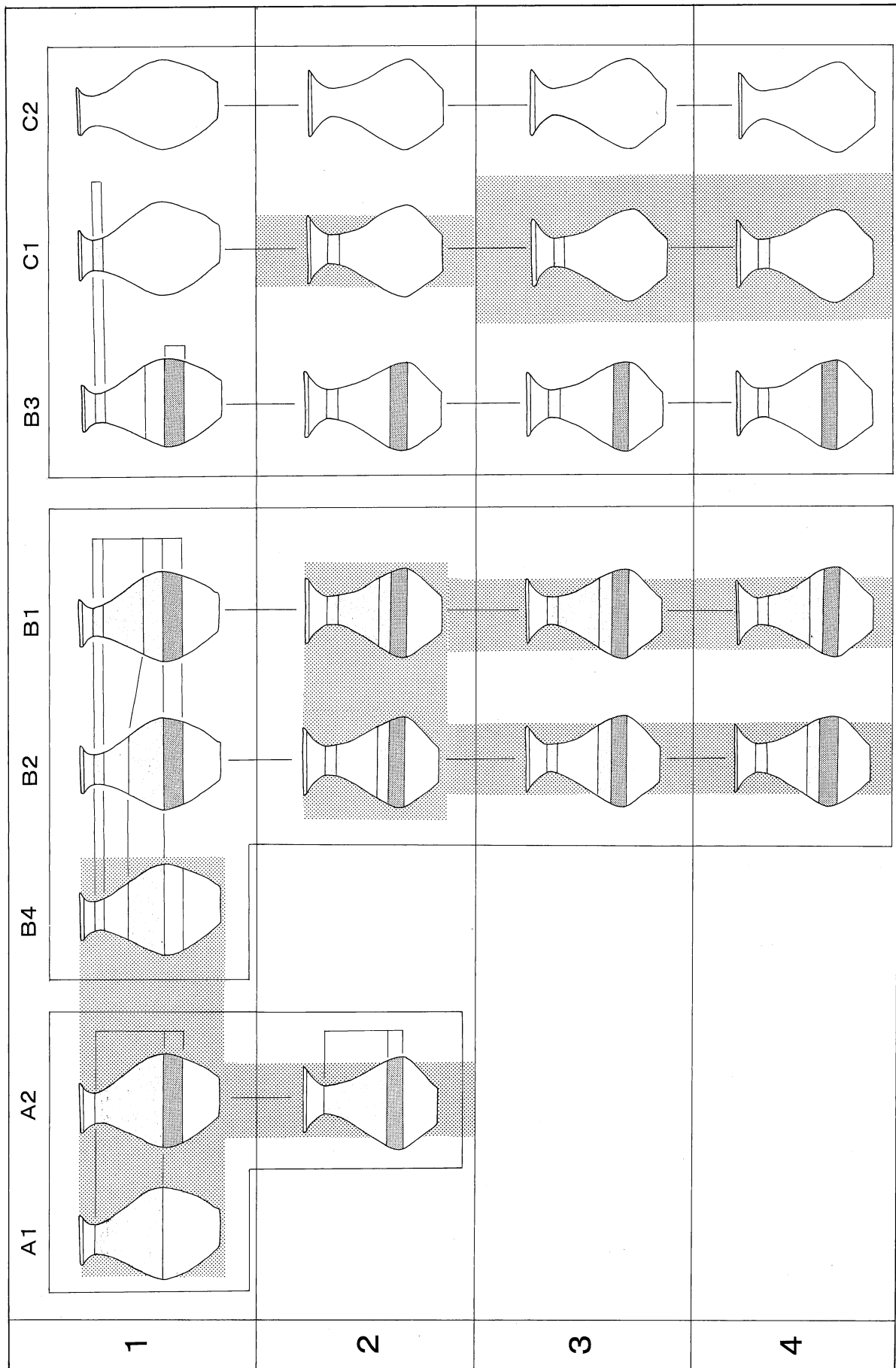
IVのB4系統で、横位多段の連続施文の中に幅狭の無文部を作出し、これがIII文様帯となり頸部～胴部文様帯を分化する。分化が進んだB1・2系統は、B4系統の影響を受けて成立したものであろう。器形は胴部中位に最大径を持つものが多く、その位置が底部より高い点に特徴があり、栗林式古相の器形を踏襲する。

[2段階]

A2、B1・2・3、C1・2系統が存在し、A1・B4は消滅傾向にある。A2系統は1段階からの継続だが減少し、代わってB1・2が主要系統になる。B1・2系統は、III文様帯幅が拡大して頸～胴部文様帯の分化が更に進み、それに伴いIII～V文様帯が明確化する。幅狭のIII文様帯は、A2・B2系統で看取されるが僅かである。III文様帯の拡大化は、器形における最大径の位置の下降を招き、胴部中位に最大径を持つものは殆ど見られない。C1系統が増加して一定量を占める様になり、文様の簡素化を指向し始める段階である。また、D系統が小形壺に出現して、外面及び口縁部内面に赤色塗彩を施し、以後の各段階に継続する。

[3段階]

A2系統以外は2段階の各系統を踏襲するが、B1・2系統は減少傾向に転ずる。C1系統が増加して主要系統となり、胴部中位に器形の最大径を持つものは完全に消滅する。2段階で現れた文様の簡素化がより顕



第8-1図 壺形土器の系統と変遷

著となる一方で、装飾壺と呼称されたB1・2系統が確実に伴う。II文様帯はa・bに分化するものが見受けられ、附加文の施文例が出現する。

[4段階]

3段階の各系統を引き継ぐが、C1系統が更に増加する。II文様帯の分化例も多く看取され、後期初頭吉田式へ系統的に変遷する要素が増加してくる。B1・2系統は一定量が存在するが、本段階を最後に消滅する。最大径の下降が更に進み、後期初頭吉田式の器形に近づく。

5 文様帯と文様の関係

文様は「土器本文篇」で詳述されているが、壺形土器の文様と施文される文様帯の関係は、以下の通りになろう（第8-2図）。

- 口縁部 Ia文様帯：波状沈線文・縄文
Ib文様帯：押し引き列点文・縄文
Ic文様帯：波状沈線文・縄文
- 頸部 II文様帯：横走沈線文・波状沈線文・山形沈線文・山形沈線文・鋸齒沈線文・連弧文
変形工字文・押し引き列点文・櫛描直線文・櫛描簾状文・縄文
- 胴部 III文様帯：横走沈線文・波状沈線文・変形工字文・懸垂文・櫛描直線文・縄文
IV文様帯：横走沈線文・波状沈線文・押し引き列点文・変形工字文・櫛描直線文・
短横線文・短斜線文・縄文
V文様帯：連弧文・重山形文・重三角文・複合鋸齒文・重菱形文・変形工字文・
波状沈線文・櫛描波状文・縄文

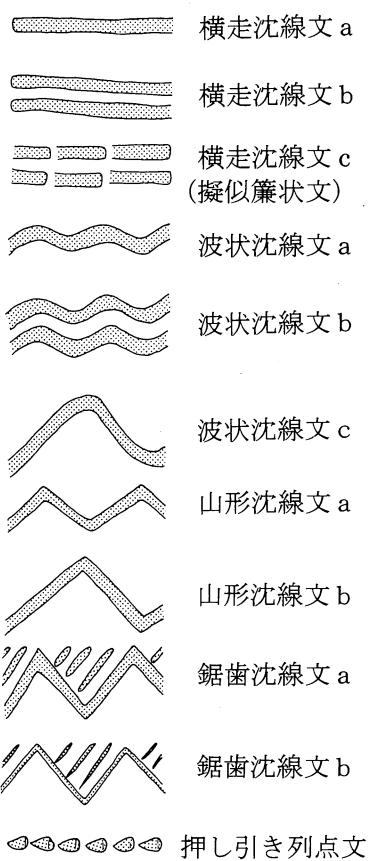
文様施文は、横位多段の密接施文傾向から文様の簡素化傾向へと移行する。施文具の差異から沈線文系と櫛描文系の文様が認められ、沈線文系は棒状工具、櫛描文系は櫛齒状工具による施文となり、壺形土器では棒状工具による沈線文系の文様が圧倒的に優位となる。今更言及するまでもなく、壺形土器は棒状工具を、甕形土器は櫛齒状工具を基本的な施文具とする事による。各段階の文様施文に、著しい差はない。例えば、II文様帯の横走沈線文・波状沈線文は各段階に共通し、V文様帯の連弧文も同様である。しかし、若干の傾向が把握されるのでそれを述べておきたい。

A1・2系統はII～IV・V文様帯へ横走沈線文・波状沈線文等、B4系統は幅広のIV文様帯へ横走沈線文・波状沈線文・櫛描直線文・短斜線文等の、横位多段の連続施文を行い、その内胴部中位に最大径を持つ例は、ほぼ1段階に限定される（第4図1・13、図版170 1958・1959等）。

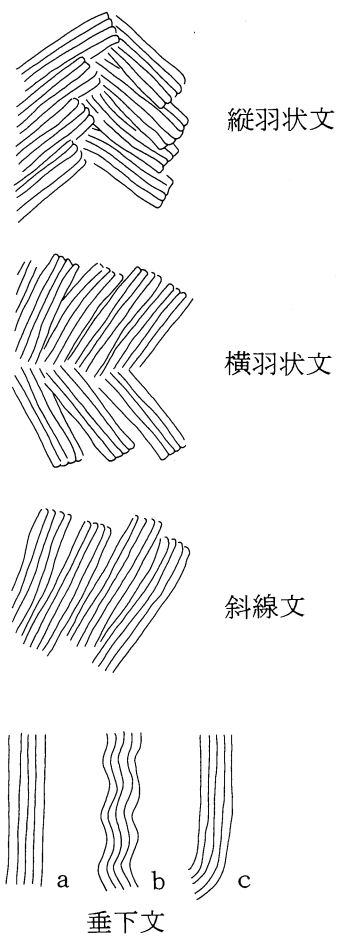
B1系統のIII文様帯には、懸垂文を施文する。懸垂文は重下文・押し引き列点文等の総体であり、赤色塗彩を以って表現する例、あるいは懸垂文間に赤色塗彩を施す例がある（第6図54）。III文様帯の赤色塗彩はIV段階に多出すると思われ、後期初頭吉田式の胴部全面に施す赤色塗彩と関連するものと考えられる。

II文様帯の横走沈線文には、擬似簾状文となる「止め」を持った横走沈線文C（第7図2）があり、簾状文（第6図41、第7図8）・連弧文（第7図10）と伴に吉田式との関連が推測される。連弧文は本来ならばV文様帯の文様で、II文様帯への施文は横走沈線文Cと同様の効果を狙うものであろう。また、II文様帯がa・bに分割され、主文様に横走沈線文・波状沈線文・簾状文等、附加文に波状文・山形文・鋸齒沈線文を施文する構成は（第6図54・57、第7図3・8）、吉田式のII文様帯への系統的な変遷が指摘される。II文様帯への擬似簾状文・簾状文・連弧文施文、II文様帯のa・b分割は3段階の土器群から見受けられ、IV段階には更に顕著となる。施文具は棒状工具・櫛齒状工具の他に、太いヒゴを束ねた様な粗い施文具がIV段階に出現し（第6図54・56）、更に吉田式では所謂「ヘラ状工具」が加わる。「ヘラ状工具」は栗林式

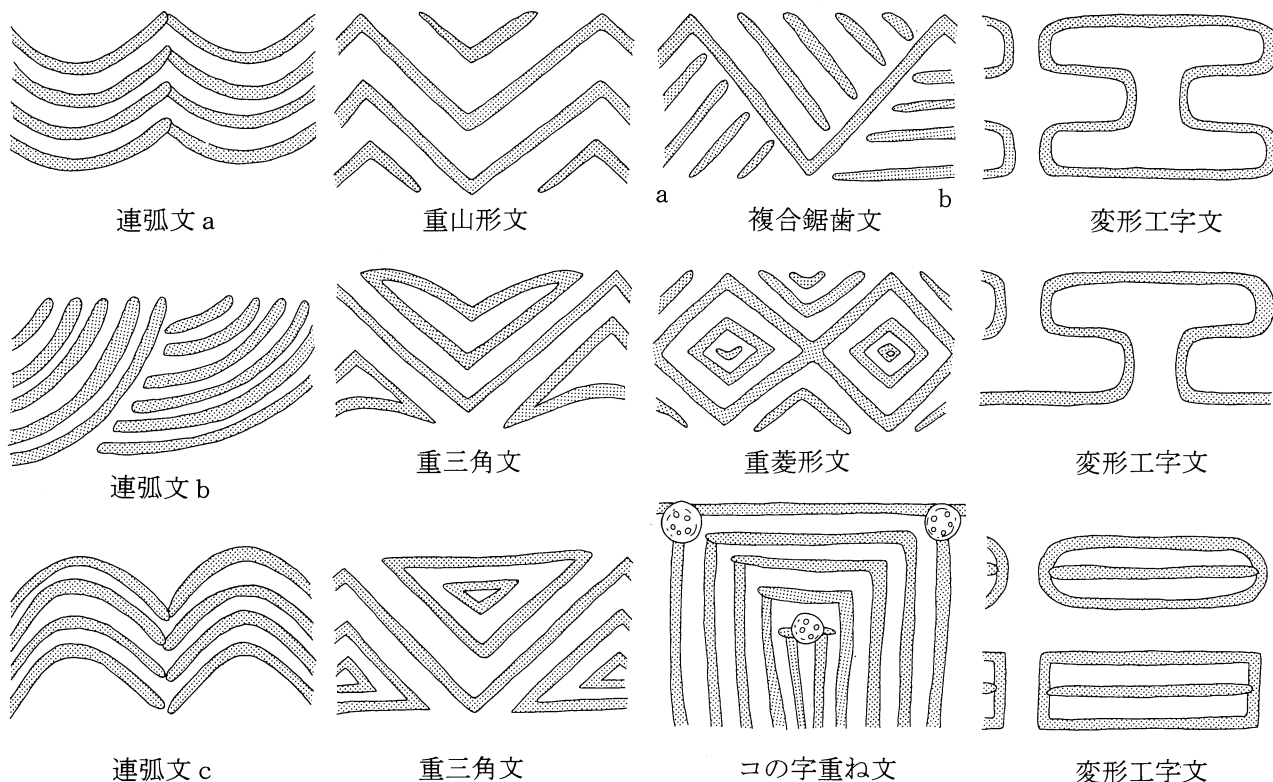
沈線文系



櫛描文系



沈線文系



第8-2図 文様の名称

には存在せず、その出自が課題であろう。

変形工字文は1～3段階の土器群に若干含まれ(図版170 1962、第6図40)、II～IV文様帯への施文が認められるが、系統性が問題である。

縄文は無節・単節・複節があり、単節が圧倒的に多く結束・結節の原体は存在しない。単節縄文には、条の太さが1条おきに同じ太さとなる、附加条ではないが附加条風の原体が若干ある。主文様の沈線文・櫛描文系の地文となる場合が殆どで横位施文を基本とするが、稀にII文様帯へ斜位方向の施文を行い、条が横走する縄文の施文例が見受けられる。横走縄文上には沈線文・櫛描文系の文様を描かず、縄文を主文様と捉えている可能性がある。縄文と主文様の施文順序は、縄文→沈線文・櫛描文系、沈線文・櫛描文系→縄文の両者が存在する。

また、縄文と同様の効果を出す「擬似縄文」がある。崩れた菱形・三角形状で刺突風の圧痕を呈する例と、極めて細かい格子目状の圧痕を呈する例が観察される。原体の素材は不明だが、刺突風のものは例えば植物体の一部、格子目状は布目痕等と想定される。

6 小結

壺形土器に文様帯を設定して9系統を把握し、4段階区分に従いながら各段階の様相を概観してきたが、栗林式中～新相の松原遺跡出土土器群と栗林式古相に属する土器群の対比が課題である。古相の土器群は、現状では長野市牟礼バイパスD地点出土土器群が知られるのみで、完形個体が殆ど存在せず文様帯構成を直接比較する事はできない。破片資料から、いくつかの系統の存在を推測するに留まる。しかしながら、牟礼バイパスD地点以前の時期である長野市松節遺跡出土土器群を見ると、栗林式古～中相と共通する文様・文様帯構成が確認され、松節遺跡以降の土器群が同一系統上の変遷である事が窺われる。従って、文様帯構成や系統を確立した上での、各時期における比較・検討が重要であろう。

文様は、各段階に共通する部分が多く、段階毎の差異は顕著でないとしながら若干の傾向を述べたが、施文技法等を考慮したもう少し細かな視点からの観察が必要と考えている。また、これまでに指摘されてきた、器面全面を装飾する「装飾的な壺」から文様の簡素化へと向かう変化の方向性は、松原遺跡出土土器群でも確認される所だが、文様の簡素化は系統間の変遷ではなく系統内の変化として捉えられよう。

以上、壺形土器の文様帯構成・系統について触れてきたが、文様帯を有する他器種との比較や最大径の位置のみに終始した器形の系統・変化等、残された課題は多い。